

# 10代で妊娠、出産した女性が社会的自立に踏み出すプロセス

## —社会的回復とセルフスティグマタイズからの回復に着目して—

佐藤美幸（東京学芸大学大学院 教育学研究科 養護教育専攻） 朝倉隆司（東京学芸大学 教育学部 養護教育講座）

### 研究背景と目的

#### 1) 研究背景

- 日本を含めて先進国では、「10代の妊娠は、社会的問題が大きく、次世代にもつながる問題である」といわれている（AGI1999, SEU1999, Bonell2004, 妻木2005, 佐藤2016, JILPT2015）。
- 10代の妊娠・出産について、欧米諸国では、予防のための性教育や母親に対する、福祉的、教育的支援をしている。しかし、日本では圧倒的に数が少ないため、若年女性人口千対出生率が50年間ほぼ同じ割合で推移しているにも関わらず（人口動態統計）、10代の妊娠・出産は、個人または家族の問題とされ、可視化されていない（森田2008, 大川2016）。
- 日本では、2000年代までは、10代の妊娠、出産は医学的な問題が指摘されていた。しかし現在は、社会的な問題のほうが大きく取り上げられ、10代の妊娠、出産は「予防するもの」として、研究や福祉支援がされてきた。（小川ら2006, 森田2015）
- しかし昨今、10代で母親になった女性が、母親になることで社会的承認を得て自己実現していること（大川2016, 林2015）や10代で母親になった女性のポジティブな面を生かす支援と青年期にある母親としての教育支援の必要性（森田2015）を述べる研究がなされてきている。

#### 2) 研究課題

10代で母親になった女性のポジティブな面を生かす支援や教育を行うためには、10代で母親になった女性の実態や成長プロセスを明らかにする必要がある。しかし、先行研究は少なく、困難やパブリックスティグマがある社会で、なぜ「10代で母親になる」生き方を選び、どのようにして成長し、社会での自立を目指すのか、そのプロセスは十分に明らかになっていない。

#### 3) 研究目的

本研究では、16～19歳で妊娠し、母親という生き方を選んだ女性が、どのようにして社会的自立をしようとしているのかそのプロセスを明らかにすることを目的とした。青年期の社会的自立とは、身体的・精神的・職業的自立観の複合体と考え、今回は、精神的・職業的自立に着目した。

### ～10代で出産した女性が指摘される社会的問題と課題～

#### 【社会的背景】

- 10代母へのスティグマ**  
本来教育を受けているはずと期待される年代なのに、親となる
- ・高学歴社会、単一的進路選択（高校進学）の社会でのマイノリティ
  - ・社会的に自立できていない（未成年）
  - ・婚前妊娠（85%以上）へのスティグマ

#### 【母親になることを選んだプレッシャー】

- 現代は、親になることは個人の選択・責任とされている
- ・子どもは「授かる」から「つくる」存在
  - ・キャリアリスクへの覚悟を要求される
  - ・子どもへの過剰な養育役割の要求

#### 【個人的背景】

- 10代で出産した女性とは？**  
思春期と成人の発達課題を併せ持つマイノリティとしての存在（全出産の1.2%程度）であり、多くの問題を指摘されている
- 【高い発生率】
- ・貧困率（生活保護受給率）・未婚率
  - ・離婚率・母子家庭率・非正規雇用者率・DV率
  - ・社会からの孤立化（母子健診未受診等）
- 【低いもの】
- ・自己肯定感・学歴（学業の中断）

#### 【出産した子ども】

- 【高い発生率】
- ・非嫡出子率
  - ・貧困率
  - ・虐待率・発達障害・学力不振・不登校
- 【低いもの】
- ・自己肯定感・学歴

→よって、10代での妊娠、出産は防ぐべきものとされている

### 研究方法

#### 1) 対象者

16～19歳で妊娠・出産し、現在子育て中の母親かつ、子育て歴10年以内の母親、11名

#### 2) 対象者設定理由

年齢を「16歳～19歳」としたのは、法的に婚姻ができ、比較的主体的に出産を選ぶことができる年齢と考えたからである。また、「現在子育て中の母で、子育て歴10年以内」としたのは、ある程度の時間経過の中で、当時の状況を思い出し、自己の変化を語る対象者と考えたからである。

#### 3) 方法

2016年9月～2018年8月までの期間で、半構造的インタビューを実施。対象者は西東京市役所保健師の紹介、及び研究者の知人、対象者からの機縁法によって、選定。居住地は、東京、静岡、茨城県。インタビューは、初回は、80～120分、必要に応じて複数回実施した。

#### 4) 分析

M-GTAによる質的帰納的に分析した。

#### 【インタビュー時の対象者(11名状況)】

妊娠年齢	出産年齢	現在年齢	最終学歴	配偶者(妊娠時年齢/最終学歴)	子どもの数(育児歴/年)	職業	その他
18	19	28	専門学校中退	有(19/大学中退)	2(9)	パート	特定職種への就職希望
19	19	28	大学中退	有(19/大学中退)	2(8)	常勤事務	PTA・学校ボランティア活動中
19	19	28	高校卒	有(19/中学卒)	3(8)	専業主婦	地域ボランティア活動中
17	18	19	高校中退	有(28/大学卒)	1(1)	専業主婦	高校進学希望 特定職種への就職希望
17	18	19	高校中退	無(17/高校卒)⇒未婚	1(1)	パート	通信高校在学中 特定職種への就職希望
17	18	26	高校中退	無(17/高校卒)⇒離婚	2(8)	パート	通信高校在学中 特定職種への就職希望
19	19	24	高校卒	有(20/中学卒)	3(4)	専業主婦	特定職種への就職希望
18	19	27	大学中退	有(19/専門学校卒)	2(8)	パート	大学進学が 特定職種への就職希望
17	18	26	高校中退	無(28/高校卒)⇒未婚	2(8)	専業主婦	高校進学希望 特定職種への就職希望
16	17	19	高校卒	無(20/高校卒)⇒未婚	1(2)	パート・家事手伝い	就職希望
17	18	19	高校卒	有(17/高校卒)	1(2)	専業主婦	就職希望

### 研究結果と考察

#### 1) 全体のストーリーライン

インタビューで得られた質的データを、精神的・職業的自立に着目して分析した結果、54の概念が抽出され、13の категорияが生成された。10代で妊娠・出産した女性が社会的自立に踏み出すプロセスとして、「社会的回復」と「セルフスティグマからの回復」の2つのストーリーラインが描かれ、互いに影響し、レジリエンス(Masten1990)のプロセスとなっていた。2つのストーリーラインには、「原家族からの支援と依存」「ソーシャルサポートの支援と依存」「パートナーとの関係」が影響していた。

#### 2) 社会的回復のストーリーライン

37の概念が抽出され、7つの категорияが生成された。まず、10代で妊娠した女性は、【出産への葛藤と使命感】をもつ。妊娠を希望していた女性もいるが、多くが予想外の妊娠にショックをうけ、未成年であるがゆえ、出産し、母になることについて葛藤する。しかし、母親になることに使命感を感じ、母親になるために「学業を手放す」等の選択を行い、新生活の準備を行う。その決断には、「学業は取り戻せるもの」と「命は取り戻せないもの」という思いがある。このような、葛藤や選択は予定外の妊娠をした成人女性にもみられるが、その選択において、成人女性は手放すものが「すでに手に入れているキャリア、またはその延長にある」ことが多いのに対し、10代の女性は「まだ手にしていないキャリア、手にしたかったキャリア」である点が、異なる。

10代で母親になることを選択した女性は、母親になることに使命感を感じ、「子ども優先の育児に専心」するが、それは「孤独な育児」であり、時に「離人感覚」をとまなう。しかし、やがて周囲の助けや子どもとの関係において、母親役割に柔軟に適應していく。これはルービン(1997)の母親役割獲得過程やスターンら(2012)の「母親になる」過程と類似している。このことは、孤立しやすい10代の母親も、適切な支援があれば、母親の役割に適應していくことを示している。

そして「母親としての自覚が芽生える」ことで、新たな友人や家族との【つながりの構築や再構築を通して、母親としての社会的評価を得る】。それによって、女性は自尊感情を取り戻し、【母親としての自立やキャリアを考え始める】ようになる。これは、Marcia(1989)やLifton(1999)が現代の青年期の特徴として、多元的自己形成を述べているように、10代で母親になった女性も、「母親だけではない自己」、つまり社会的自己、多元的自己を形成しようとしているためと考える。

その多元的自己とは【10代で母親となった自分を社会でいかしたい】自己であり、そこには、自己におきた「経験をプラスに意味づけし、「経験をいかしたい」という思いがある。それが、【社会的名誉回復のために行動していく】ことにつながる。これは、ポジティブ心理学の「ベネフィットファインディング」(Helgeson2006)であると考えられる。ベネフィット・ファインディングとリカバリーには有意な正の相関があることが明らかになっているため、このことが、手放した学業や社会復帰に必要な過程であり、これがセルフスティグマタイズからの回復に影響している。

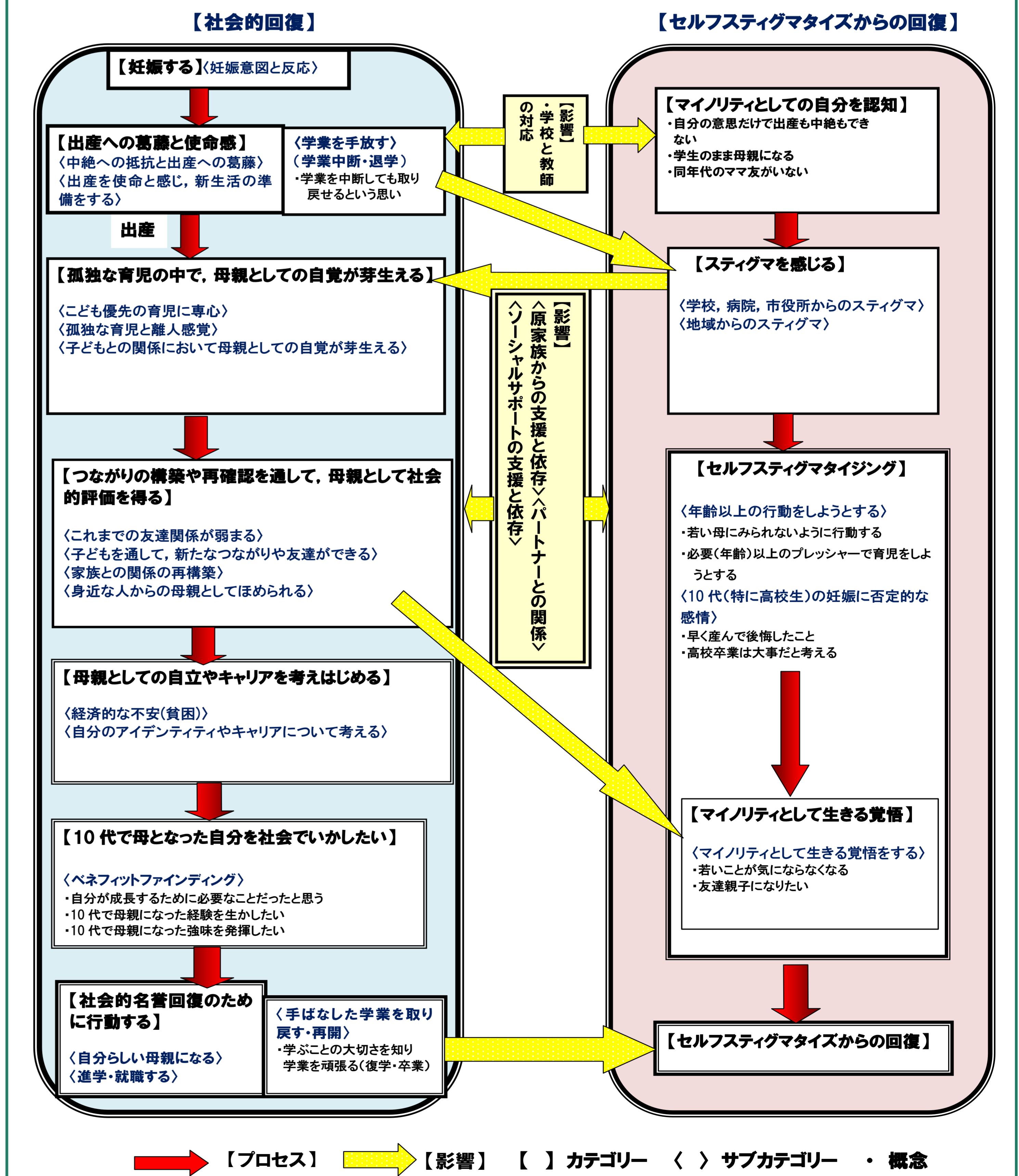
#### 3) セルフスティグマタイズからの回復のストーリーライン

15の概念が抽出され、5つの категорияが生成された。10代で母親になるために、「学業を手放す」等の選択をした女性は、「学校」等の社会から切り離され、【マイノリティとしての自分を認知】する。その後、病院や地域で、未成年のため、要支援者として扱われることで、【スティグマを感じる】ようになる。そのスティグマがやがて、子育てをしていくために、誰かに頼らなければならない自分の未熟さを認知することによって、【セルフスティグマタイズ】されていく。また、子育てへのプレッシャーを過剰に感じさせ、女性を年齢以上の大人の母親として、育児に専心させている。

やがて、子どもの成長と身近な人との【つながりの構築や再構築を通して、母親としての社会的評価を得る】ことが、【マイノリティとして生きる覚悟】に影響していく。それが【セルフスティグマからの回復】につながる。【セルフスティグマからの回復】には、【社会的名誉回復のために行動していく】ことが影響している。このことは、Yardley(2008)も述べており、10代で出産した女性が「能力が低い」「母親になるしかなかった」等の社会的スティグマに反する意欲を持っていることを示している。

### 10代で妊娠・出産した女性が社会的自立に踏み出すプロセス

#### —社会的回復とセルフスティグマタイズからの回復—



#### まとめ

10代で妊娠・出産した女性は、母親になるために、「手にするはずだった学歴や職歴を手放す」。「孤独な育児」や「スティグマ」を体験する中で、身近な人との【つながりの構築や再構築を通して、母親としての社会的評価を得る】経験をする。そして、その経験の「強み」を生かして、「手放した学歴や職歴を取り戻す」ことで社会的回復をする。同時に、母親になることで傷つき、傷つけた自己からの精神的回復もおこなっていく。これらが、10代で妊娠・出産した女性が社会的自立に踏み出すレジリエンスのプロセスであった。